

居住者の居住志向と交流からみたネットワークの特徴

—奈良県橿原市今井町の場合—

尚綱短大 ○牧野 唯 奈良女大 今井範子

【目的】重要伝統的建造物群保存地区・奈良県橿原市今井町において、子世代との別居化に対応した住環境計画のあり方を考えるため、居住者の親族・近隣・友人との交流の実態を把握するとともに、高齢期に向けた居住志向を検討することが本研究の目的である。

【方法】保存地区を全対象とした留置法自記式による質問紙調査を実施。調査時期は1997年4月下旬～5月上旬。有効サンプル数は世帯票329票、個人票712票。調査内容は、永住意志や子との住み方の希望、高齢期における住宅の志向や介護への希望・期待、居住者の親族（別居子・きょうだい）・近隣・友人との交流状況、現在気がかりなこと等。

【結果】1) 親子同居の根強い今井町でも、子世代とは歩いて約5分の所に近居を希望したり、距離にこだわらない住み方が志向されつつある。年齢別では、50代の者に永住希望が6割存在し、高齢期には現在の住宅で配偶者や娘による身の世話を期待されている。一方、50代未満の者には永住希望が少なく、高齢者用の住宅や施設を希望する者も存在している。2) 居住者の親族（別居子・きょうだい）は、橿原市や奈良県内に居住する場合が多い。近隣とは親しくつきあう者が多く、病気のお見舞等の交流がある。40代以下の者には近隣つきあいが少なく、勤務先・大学等で知り合う今井町以外の友人との交流が多い。60代以上の者には自治会・婦人会や共通の趣味等を通じた友人との交流がみられ、町内にも友人のいる割合が高い。3) 子世代（既婚子）との居住形態別では、近居の場合に近隣と親しい者が多く、悩み事の相談や買物を頼んだり頼まれる等、近隣から精神的サポートや家事援助を受けている。血縁のみならず地縁ネットワークの存在を背景として、近居が行われる傾向は強い。